
海からの少女

トゥカチンチラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海からの少女

【Nコード】

N3655Z

【作者名】

トウカチンチラ

【あらすじ】

これから起きる悲劇に関する序文。

序

この物語は紛れもないフィクションである。従って時代は過去・現代・未来……いつの時だろうと構わぬ。

また、出来事の起きた国もさして重大なものではない。ただ、起きた場所は孤島であるということ念頭に入れておけばよい。孤島……といっても絶対的な、それこそ「ロビンソン・クルーソー」のように前人未到のような孤島ではない。とある国に属したものであり、その国との行き来も一般的な船を使えば30分でできる。

こいずれにせよ、これはその孤島で起きた「理想的な悲劇」を物語化したものである。

朝（前書き）

朝、一郎、二郎、竜也の三人は目を覚まし、海へと行く。

朝

「……郎、……郎」

ウトウトしている二郎に、一郎が声をかける。

「二郎。二郎」布団の上でまだ目を半分しか開いていない二郎に対して、一郎が肩をゆする。

「起きろ二郎、朝だぞ」

「う、うん」あくびを噛み殺しつつ二郎が反応する。

「さあ、起きろ。起きて海で顔を洗ってくるんだ。」

「うんわかったよ。お兄ちゃん。」

「さあ、わかったんだったらさっさと行くだ。」

二郎が部屋から出て、下の階におりる。布団を片付けながら下の階で聞こえてくる会話に、一郎は耳を澄ます。片方の声は図太い。

「おお、二郎。起きたか？」

「うん、お父さん。」

「よし、海に出て顔を洗ってこい。今日はいい天気だ。」

「うん。丁度これから行ってくるころなんだ。」

「出来るだけ早く戻ってこいよ。朝飯の準備ももうそろそろで終わるから。」

「わかったよ。」

会話が終わったと思ったらパタンとドアが閉まる音がする。その後、図太い声の行先は一郎になる。

「どうだ一郎？布団の片付けは終わったか？」二階からでもかなり鮮明に聞こえる。それほど声の音が大きいということだ。

「まだだよ親父。今やっているところ。」

「何？まだ終わってないと言ったのか？なら早く終わらせて下に降りて来い！！朝ごはんにするぞ。」

「わかったよ親父。」

「急げ！！二郎が戻ってきたらすぐに飯にするぞ。」やはり親父の

声は大きく、図太くそれ故鮮明である。

「わかったつてば。」

（やれやれ、急がないと）と親父に怒鳴られるのを危惧した一郎は、手の動きを速め、布団、シーツ、ブランケットを急いで折り畳み、片付ける。丁度最後のシーツをたたみ終わったところで、二郎のやや甲高い声が下から響いてきた。もつとも響いてきたといっても、親父のそれに比べれば雲泥の差ではあるが。

「ただ今。顔を洗ってきたよ。」と顔を濡らしながら、ドアから二郎が入ってくる。

「おお、帰ったか。おい！！一郎！！！」怒鳴り声が家中に響く。

「今行くよ！」負けじと一郎も大声を出す。とはいえども、どちらに分があるかは明確だったが。それはともかく、一郎は下に降りたすると、身長はさして高くないが、肌の焼けた、筋肉が逞しく、シヤツ一枚とハーフパンツの男がいた。

「おお、お早う一郎」

「お早う親父。」

「昨夜はよく眠れたか？」

「ああ、何とか寝られたよ。」

「よし！！朝飯にするぞ！！今日の朝は海に生きる男らしく魚だ。ほら、二郎も！ドアのところで突っ立ってないで飯だ！！」

「うん。お父さん。」

三人とも居間にある机に向かう。机は丸い形をしており、正座をして食事するのに適している程の高さである。机の上には、御飯、秋刀魚、ハマグリの入った味噌汁となっている。しかし、御飯の盛り付け具合、秋刀魚の粗のある焼き方から見て、それは料理が下手というよりも、よく言えば男らしい、悪く言えば荒々しい朝飯の出し方であるといえよう。

ここでちよつとこの家、および三人が座っている机を初めとした家具について説明したい。

まず壁は丸太による木でできていることから、この家は木製の家で

ある。そして二階建て。一階には親父、名前を矢口竜也、の部屋があり、二階には二人の息子である一郎と二郎の共同部屋がある。（もつとも、二階といつてもどちらかというとその大きさから屋根裏といった方が正しいが……）一階には竜也の部屋の他、居間・台所・トイレがあり、居間が専らの三人の共同空間といつていいだろう。もつとも居間には必要最小限のものしかない。今ここで三人が座っている机の他、木製の椅子が2つ、暖炉、戸棚がある位である。インテリへのこだわりが微塵にも感じさせない部屋である。窓も一つあるつきりであり、今は窓から朝の陽ざしが漏れてきている。もし、インテリらしきものをひとつあげよ、と言われたら壁にかかっている一枚の肖像画である。肖像画には女性が載っている。この女性は30代くらいの長髪であり、やや肉がついている。そして何よりの特徴として、女性であるにも関わらず、見るものに「たくましさ」という概念を連想させるのである。その顔にはどこか強さを感じさせるのである。その肖像画に、箸を握り魚に手を付けようとしながら、一瞥を竜也がくれる。

三人は机上の料理に手を付けながら、もくもくと箸を動かす。やがて竜也が相も変らぬ図太い声で、一郎に話しかける。

「一郎。朝飯を食べたら早速海に出るが準備はいいのか？」

「おお。大丈夫だよ、親父。」

「お前はもう15歳だ。そろそろ本格的に漁業の訓練を重ねて、家系を継いでもらわないとな。まだ6歳の二郎にはまだ漁の訓練は早すぎて、家で居留守をすることになるがな。」

「わかってるよ。そう毎朝毎朝いわなくてもさ。」

「ふふ。逆に俺はもう51だ。老い耄れといつてもいい頃さ。やはり寄る年波には勝てなくてな、最近肉体の衰えが感じつつあるな。」

「何言ってるんだよ。親父はまだまだ十分現役だつて。」

「いや、そんなことはねえ。毎日仕事しながら、自分の肉体の衰えをいやでも感じつつあるんだ。だからこそだ、一郎、お前にはな

おさらの事頑張ってもらわねえとな。俺がいなくなったら、一体誰が俺らを養うんだ？俺は別にもう十分生きたから、死のうと鎌わねえが、二郎は一体誰が育てるんだ？わかってると思うが、家の主つてのは強い人間じゃないと務まらねえ。」とここで、またもや壁にかかっている女性の肖像画に目をくれる。

「強い、逞しい人間じゃないといけねえ。そしてお前がその強い、たくましい人間にならねえといけないんだ。だから俺がこうしてまだ現役である間に特訓あるのみだ。わかったな？」ドンと強く一郎の肩をたたく。

「わかってるよ。もう耳にタコが出来るくらい聞いたつてば。」
いつものことのように一郎は軽く受け流す。強く叩かれた肩も平気のようだ。

「死活問題だからさ。それに年をとると、何分説教臭くなっちゃうからな。ところで二郎！！」

「うん。」二郎が静かに竜也の方に顔を向ける。

「俺らが海に出ている間、わかってるな？」

「うん。さつきも言ったけど、お留守番でしょ。わかってるよ。」

「よし、わかってりゃ、それでいい。」と竜也は元氣よく頷き、二郎の背中をポンポン叩く。

再び沈黙。三人ともまたもや黙々と箸を進める。そして三人全員が食べ終わったら、

「一郎、それじゃそろそろ行くぞ。」と着替えて壁にかかっているコートを着ながら一郎を促す。

「ああ、行こうか、親父。それじゃ二郎、後は頼んだぞ。」と一郎もコートを着る。

「うん。」と二郎は一郎をじつと見つめる。

「じゃあな。」と二人は外に出る。

外に出たら、すぐそこに海があった。そして海はどこまでも果てしなく続いている。これからこの二人は海で漁をしようというのだ。ここは孤島である。半日もすれば島全体を遊歩することができる

孤島である。といつても、「ロビンソン・クルーソー」のような前人未到の絶対的な孤島である、というわけでは決してない。船を使えば30分程で陸に行くことができ、事実竜也は毎日の漁業帰りに陸に行っていた。というのも、捉えた魚を陸の市場に持つていく必要があるからである。島に訪れる人間もいないわけではない。とはいえ、孤島であることに変わりはない。つまり、住んでいるのは竜也、一郎、二郎の三人しかいないのである。

「さつきまではいい天気だったのに、雲行きが怪しくなったな。」

と、訝る竜也。実際、空を見上げて見ると朝の日差しは薄まり、雲が空を覆っている。

「雨が降るかな。」

「さてな。いいか？例え嵐が起きたところで、それも一つの経験だと思え。なーに、心配すんな、ちよつとやそつとじゃ、俺の船は壊れやしねえ。」

「それは重々承知さ。」

「よし行くぞ。」

と、二人が歩いて行き着いたのは、鉄の船。全長15メートル程ある、確かにちよつとやそつとじゃ壊れそうもない船である。

「乗るぞ。」

「ああ。」

二人して船に乗り、海へと赴く。

海（前書き）

竜也と一郎は二人で漁の為に海に出た。

海

海に出た二人。先ほどまでいた島もみえなくなり、また、船に乗る際に感じた潮の匂いも感じなくなる。辺り一面にはただ水があるばかりであり、時折かもめが空で鳴く声が聞こえる。空は雲が太陽を遮断しているような状態であり、明るい灰色という表現が適切である。

舵取りがデッキにあり、親父が舵をとっており、その側にくつつく形で一郎がいる。

「いいか一郎？今までは一緒についてくるだけだったが、今日からはお前も実際に漁をやるんだ。」

「わかってるよ、親父。今日から俺も手伝う。一人前になるようにしっかり訓練するさ！」

「おお、その意気だ。それじゃあ今日は実際に網をやってもらう。わかるな？タイミングを見計らって魚網を海に投げ込むんだ。いいな？タイミングを間違えるんじゃないぞ。そしていったん投げて、獲物がある程度食いついたと感じたら、急いで引き揚げるんだ。」

「わかった。」と頷く一郎。そして一郎は船内にある大きな魚網をせつせと運んできた。だがまだ筋肉、体質が育ち盛りの一郎にとっては、網に運ばされた、といった感じだが。

「持ってきたよ、親父……それでこれをどうすればいいんだ？」

「俺が「いい」というまで待つてろ。今から魚がたくさん獲れる所へ連れてってやる。そこで網を投げ込むんだ。」「わかってるよ……じゃ待つてろ。」ただ一郎は黙ってうなずくばかりである。

船は移動する。大海原をどこまでも。見えるはただ海ばかり。だが何も、常に海原においてポツンとただ一隻の船、というわけではない。時には島も遠くから見えない事もない。長年海に生きてきた

竜也のことだ。きつとああいった島についてもその名前、地図上の位置、住民について理解しているに違いない。その島をどこか悲しそうな目で見る。

「見えるか……一郎？」とさもありげに一郎に声をかける。筋肉質でたくましい親父が、ときおり悲しげになることは、一郎ももう慣れているため、さして驚かない。こういう場合はただ必要最小限の「見えるよ」という返答で十分である。

「あの島には……いやあの島に限ったことじゃないが……知り合いが何人かいた。だが……もう多くのものも死んでしまった……何故かわかるか？」

「……」クビを振る一郎。

「海に吞まれた奴もいれば、寿命で死んだ奴もいる。この目で直と亡くなる時の者を見た奴もいる。人の生命なんて儚いものさ……覚えておけ、俺らの今こうして感じ取っている息吹もまたいつかは、それもあつという間に枯れてしまうことをな……」

「……」

「そして、くどいようだが、最初に枯れるのは俺の方だ。だから頼むぜ一郎……しっかりと一人前の海の男となってくれ。」そう、舵を強く握りつつ、一郎の方ではなく、真正面の海を見ながら、いつもの図太さで大きいさはないもの力強く述べた。

「なつてみせるさ。母さんもそれをのぞんでいたんだ。俺が一人前になって、はやく二郎のやつも立派に育ててやらないと。」

「（忍……か……本当に生命なんて仮初のもののみたいだな）よし！！わかってるんだな。その意気だ。」いつもの声の大きさを取り戻す。

そして竜也は船を止める。どうやら網を引き下ろす場所についたようだ。

「よし！！一郎、今から網を海に下ろしてもらつ。いいか、タイミングは今回は俺がいう。」

「……しばらく時間が空く……」よし今だ！！」

一郎が網を海の中に投げる……いや投げ入れようとする。しかし突然竜也がおそいかかってきて

「ばかやろうー！」そうげんこつを一郎の頬に浴びせる。それを受け一郎は顔を横に向けながら頬を手で押さえる。

「投げ込む際の、網の向きが逆だ。これじゃ、魚一匹とれっこしねえぞ。もう一回だ。」と相手に怒鳴りつける。それを涙を必死になつて抑えながら聞く一郎。

「もう一回だ。」

網の向きを逆にして、おそろおそろ網を海に投げ込む一郎。

「よし、それでいい。」

竜也の肯定の返事か、一郎の気が緩み、手の握りが弱まった。すると

「ばかやろうー！手を緩める奴がいるか！！お前が網に引っ張られて海におっこちたらどうするつもりだ？」

やはりまたもやの怒声を受けて、一郎は手はおろか、全身を引き締める。

「一郎、覚えとけ、海っているのは恐ろしいところだ。いつどんなハプニングで危険がやってくるかわかるもんじゃねえ。」

必死になつて手を握りしめながらも、頷く一郎。だが、魚が網にたくさんかかったようで、握りしめるのがきつくなってきたのが、一郎の顔色からわかる。それを察した竜也は、自分も網を握りしめるのを手伝う。

「よし、そろそろいい頃合いだ。引け。」

力をこめて引っ張ろうとする一郎だが、なかなかひけない。歯ぎしりしながら必死になつて、引っ張ろうとする一郎。だが船にまで引っ張ってくるのは難しい。

「仕方ねえな。一郎。筋肉トレーニングをしっかりとやっつけ。」と竜也の頭を軽くなぐりつつ（といっても一郎にはかなり痛かったが）自身も手伝う。

・・・・・・

無事魚も引き揚げ、船内へと移す。そしていよいよあの孤島に戻ることにあった。だが灰色の空からも予期することができたように雨がポツポツと降ってきた。その事には一向に頓着なく

「よし！一郎。今日はもう十分に獲った。帰るぞ。」

「了解だ、親父。俺にもう手伝えることはないかな・・・・」と先ほど殴られた頬のアザをさわりながら応答する。

「ねえよ。特に。」

「しかし、今のままじゃ全く俺は役に立っていないくて・・・・」
「いいんだ。気にすんな。これから徐々に覚えてこう。俺も最初はお前みたいなもんだったさ。」とニツ、と陽気に竜也は笑う。

一郎はそれを情けなさ気に見る。

さて、相も変わらずポツポツと降っている雨だが、その度合は次第に強くなっていく。「ポタン、ポタン」という細切れの音から「ザーッ」という一筋の音へと変わっていく。

「雨がよいよ降ってきやがったな。海も大分荒れてきた・・・・」
「と、海を観察するかのようにあたりを観望する。そして視線を辺りの海から、一郎へと移す。見ると次郎が不安そうな顔をし始めていた。

「どうした、一郎。顔色が悪いぞ。」

「・・・・なんでもない。気にしないでくれ・・・・」と先ほどとは違い、声のトーンを沈めて返答する。

「そうか？お前怖いんじゃないのか？」と、嘲っているのではなく、真剣にたずねる。

「・・・・」それに対して一郎はまともな返答せずに、ただ黙って下を向くばかりである。

「嵐が来ること。それが怖い。そうじゃないのか？」

「・・・・」やはり俯いたままである。

「正直に答えろ！！」雨の音を突き破るような図太い声で怒鳴る竜也。

「……うん。」やはり暗いトーン。

「……つとすまねえな。一郎。……気にするなつて。怖がることは決して恥じゃない。」

「うん……わかってるけど……やっぱ雨や嵐が……」次第に雨がどんどん強くなっていく。

「さつき海に出る前に言っただろ？これ位の雨じゃ、この船はびくともしないつて」

「……うん。」

「それに俺がついている。心配すんな。」そう一郎の頭を撫でながら、優しい声で慰撫する。しかし次の瞬間一転して

「だが一郎、怖がつていいのは最初だけだ。漁だつて下手でいいのは最初だけだ。いつまでもその状態じゃ、ま、口うるさいだろうが、二郎を養えないからな。」

「……うん。」

雨が更に強くなる。波しぶきもあがり、それが船舶のデッキへと流れてくる。

「大丈夫……だよな？」

「大丈夫だ。俺を信じろ。」

竜也親父はこの状態の中。ひたすら舵を握り前をみる。仁王立ちである。その様子から、雨も嵐も波しぶきも、この人間にとっては恐るるに足りない存在なのであろう。

一郎はその親父の腕をしっかりと両手で握った。固い。例え何がかよつともビクとしなさそうな固さである。まるで、豊穣なる大地に深く根を張った木のように。一郎は親父の顔をみた。親父がただ真正面に航路をとることしか頭になさそうな親父の横顔を見上げた。そして思った、いつか自分もこういう海の男になることができたらな、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655z/>

海からの少女

2011年12月13日11時53分発行